

キャンベル・コラボレーション 系統的レビュー プロトコル

施設内暴力：暴力に対する状況的要因の影響の系統的レビューおよびメタ分析

レビューワ： Lisa Gadon
Research Fellow
Glasgow Caledonian University

David J. Cooke
Professor of Forensic Clinical Psychology
Douglas Inch Centre and Glasgow Caledonian University

Lorraine Johnstone
Clinical Forensic Psychologist
Douglas Inch Centre

連絡先情報： Dr. Lisa Gadon
Glasgow Caledonian University
Psychology Department
City Campus
Glasgow
G4 OBA
Scotland

Tel: 0141 331 8456
Fax: 0141 331 3836
Email: l.gadon@gcal.ac.uk

支援元： NHS Greater Glasgow Research and Development Directorate

目次

1 . レビューの背景	3
2 . レビューの目的	8
3 . 方法論	8
ステージ 1	
3.1 研究の包含基準と除外基準	9
3.2 関連する研究を識別するための検索方法と，検索結果の管理	13
3.3 データ管理	14
3.4 主要な研究で用いられている方法論の記述	15
3.5 個々の知見の判断基準	15
3.6 コーディングのカテゴリー	15
3.7 統計的手続きと慣例	16
3.8 質的研究の取り扱い	16
3.9 追加的情報	18
ステージ 2	
4.1 研究の包含基準と除外基準	18
4.2 関連する研究を識別するための検索方法と，検索結果の管理	19
4.3 データ管理	19
4.4 主要な研究で用いられている方法論の記述	19
4.5 個々の知見の判断基準	19
4.6 コーディングのカテゴリー	19
4.7 統計的手続きと慣例	19
4.8 質的研究の取り扱い	19
5 . 時間枠	20
6 . レビューの更新計画	21
7 . 謝辞	21
8 . 利害の対立	21
9 . 参考文献	21
10 . 付録 コーディング・フォーム	26

1. レビューの背景

施設内暴力は、深刻な問題である。National Health Service Trusts が英国で行った最近のサーベイは、暴力事件の水準の高さを報告している。2000年から2001年に、スタッフに対する暴力あるいは虐待事は、84,272件報告された。この数は、1998年から99年に報告された65,000件に匹敵する（Department of Health, 2002）。同様の事態が、刑務所の中にも出てきている。例えばWortley (2002)は、1995年にアメリカの刑務所では、囚人同士の暴行が約26,000件あったと報告している。その内の83人が死亡した(Stephan 1991, Wortley 2002に引用)。報告される事件は、施設内暴力の実際の水準を大幅に過小評価したものであるということが、はっきりと認識されている。例えばCooley (1993)は、刑務所内暴力の実際の比率は、公式記録の5倍ほどだろうと推定している（Wortley, 2002に引用）。

施設における暴力の影響力を認識するのは難くない。スタッフと患者は、肉体的に傷つき、心理的に動揺するだろう。財産は破壊され、管理体制とプログラムは崩壊し、その結果脆弱化する。暴力的な患者は、さらに長く収容されるだけでなく、より費用がかかり、制限的な状況に縛られる（Cooke, 1992a; Goetting and Howsen, 1986; Porporino, 1986）。施設内暴力は伝染しやすく、暴力の蔓延につながるだろう（Lion, Madden and Christopher, 1976）。暴力がより人目に触れるようになると（屋上でのデモンストレーション、暴動、および人質事件）、医療システムと刑事司法システムに対する国民の信頼を損ねるだろう（Porporino, 1986）。

暴力の経済的効果は、広範に及ぶと見なすことができる。能力障害、疾患、無段欠勤、そしてスタッフの配置転換によって、組織を整理する直接的なコストがかかるし、職務遂行力の減退、サービスの質の低下、（私立刑務所と公立刑務所の問題と潜在的に関わる）競争力の低下による間接的なコストもかかるだろう。さらに、組織のイメージが崩れる、重要なスタッフのモラルや動機付けの低下、組織への忠誠心の低下など、目に見えないコストもあるだろう。The European Convention of Human Rights (ECHR)の法規のもと、国の諸機関には、管轄区域内で「予測できる」リスクから自分たちの身を守る「積極的義務」がある（Houchin, 2003,個人的な会話）。それ故、組織は訴訟に直面し、人が施設内で暴力を受けた場合、注意義務を怠ったと裁決されるだろう。

施設内暴力の原因

施設内暴力の原因を調べるとき、精神衛生の専門家などは、これまで心理的性質および社会文化的性質という個人の変数に注目しがちで（例えばMonahan et al., 2001; Quinsey, Harris, Rice, & Cormier, 1998; Webster, Douglas, Eaves, & Hart, 1997）、その他のレベルの変数を実質除外してきている。例えばHCR-20（Webster, Douglas, Eaves, and Hart, 1997）のようなリスク評価マニュアル（Risk Assessment Manuals）は、個人の特徴に傾注してい

る。同じように、輸入モデル（Importation Model：例えば Irwin and Cressey 1962）のように確立された理論は、個人間要因の役割を強調している。このアプローチは、囚人が自身の社会史や特徴を刑務所内に持ち込んでおり、そのような側面が刑務所環境への適応に影響しているということを前提としている。

刑務所に入る前の経験，特に犯罪的価値観を身に付けたこと，および囚人の個人的特徴が，囚人サブカルチャーに同化する程度に影響する。

（Paterline and Peterson, p.429, 1999）

輸入モデルは、囚人サブカルチャーと年齢、人種、教育水準といった個人的要因との関係を調べた研究に対して支持を見出している（Alpert, 1979; Jensen and Jones, 1976; Wright, 1989）。

個人的要因が、暴力を理解・管理するために決定的に重要である一方、行為はそれだけでは起こらないことは広く認識されている。状況的要因が、行為に対して非常に大きな影響力を持ちうる（Toch, 1985）。状況的要因・変数は、個人の特徴というより、暴力事件が起きる状況の特徴と定義できる（Megargee, 1982）。状況的要因は、*組織的特徴*（例えばリーダーシップ、管理、方針や手続き）、*物理的特徴*（例えばセキュリティ水準、物理的資源）あるいは（さらに）*スタッフの特徴*（例えば性別、経験、クライアントとの相互作用のスタイル）と考えることができる。スタッフが施設環境の不可欠な部分を構成し、施設の運営方法や施設を機能させる方法に影響している場合、そのような要因は、状況的変数と見ることができる。

状況的要因が結果に影響している役割は、喪失モデル（Deprivation Model）のような刑務所暴力の説明モデルで言及されている。このモデルは、「囚人による攻撃は、刑務所内のストレスに満ちた苛酷な状況の産物である」と提議している（例えば Goffman, 1961; Sykes, 1958）。このモデルは

「...拘禁される経験から起こる，囚人サブカルチャーを作る際のプレッシャーや難題の重要性を強調している」

（Paterline and Petersdon, p.427, 1999）

さらに、管理モデル（Management Model; 例えば DiIulio, 1987）は、次のような状況的要因の役割を強調している。このモデルでは、刑務所暴力の原因を、刑務所運営の失敗、セキュリティの過失、スタッフの入れ替えが激しいことと看守の間に規律がないこと、そして被収容者が素早く散らばれないほどの過密さの結果であると考えている。

職場暴力のポップコーン・モデル（Popcorn Model; Folger & Skarlicki, 1995）は、状況的

変数の重要性を記すための有用な類推を与えてくれる。Folger & Skarlicki (1995)は、暴力的な人間は、フライパンが熱くなったときにトウモロコシの最初に弾ける部分のようなものだとして主張した。なぜ特定の部分が最初にはじけるのか、その一方でもっと重要なことだが、熱を当てないとなぜどこも弾けないのかを解決するために、トウモロコシの各部分の特徴を調べるのに多くの努力が費やされる。この推論によって描き出されるメッセージは、Gendreau, Goggin and Law (1997)の次の主張で繰り返されている。

「我々が予測しているのは、個人的リスクファクター（例えば反社会的態度や行動）の大きい犯罪者が、不安定な刑務所環境で生活すると、可能性として一触即発の結果となりやすいということである。」

（Gendreau, Goggin and Law, 1997, p. 6）

だが、このモデルは、個人的リスクスケールの高くない人間でも、十分に熱せられると暴力的になるだろうということも強調している。

施設生活の一部とみなされる物理的特徴と、組織的特徴は、Goffman (1961)や Bottoms (1999)といった研究者が強調してきた。外界との接触の予防、制限、監視、および時間と空間の秩序といった共通の特徴が、鍵となる特徴として強調されている。加えて、生活の全ての側面が、一つの場所で（一つの権限のもとで、そして他の人たちと一緒に）行われるという事実や、スタッフたちと施設に住む人との複雑な人間関係が存在するという事実が強調されてきている。以上のような特徴は、施設内環境に関する重要な側面を強調しているのであって、施設に住む人を強調しているのではない。

個人的特徴についての研究とは対照的に、状況的要因の役割について行った系統的な研究は比較的少なかった。状況的要因と施設内暴力の関係を解明するために設計された先行研究は、以下の状況変数の効果を調べている。それは**込み合い**（crowding；例えば空間密度、社会的密度、短期滞在、入れ替え率、生活者数の減少）、**時間的側面**（例えば攻撃が発生した時間、月、曜日）、**運営形式**（例えば学習プログラムやレクリエーション・プログラム、監督体制、部屋のタイプ）、**セキュリティ水準**（例えば監視レベルが高い、中程度、低い）、そして**スタッフの特徴**（例えば、相互作用の質、暴力事件の管理、訓練水準、スタッフとしての経験、性別、スタッフに対する開発コースのタイプ、スタッフと囚人（患者）の比率）である。この分野における研究知見の全体像を得るために、文献の予備的な検索を行い、上述の状況変数と関係のある研究の要約を以下に示した。

込み合い (Crowding)

Cox, Pauls and McCain (1984)の社会的相互作用要望モデル (Social Interaction Demand Model)によると、込み合っていると社会的相互作用が生じるときの不確実性のレベルと、

目的の干渉が高まる。刑務所環境の中が込み合っているということは、囚人の心配、不安、認知的緊張やフラストレーションを高めさせると考えられている。人間同士が接近しているというのは、計画立てられた相互作用の見込みが高くなると考えられているように、込み合っていることと施設内暴力の間に直接的な関係があると仮説立てることは理にかなっている。ただ実証的知見はこの仮説を支持していない。例えば Megargee (1976)や Nacci, Teitelbaum and Prather (1977)は、刑務所環境での暴力行為と各囚人が利用可能な生活スペースの量は、逆の関係があることを明らかにした。この知見に対する説明は、施設が最大収容人数に達した場合、補償措置 (compensatory measures) が付け加えられるからだろうというものである。同様の知見が、精神障害者の施設についても報告されている。Nijman, Campo, Ravelli and Merckelbach (1999)は、精神科病棟で空間密度が高まる効果を調べ、空間を増やしても、暴力事件のレベルは減少しないことを明らかにした。施設内暴力との関連の中で、込み合い変数を考察する場合、社会的密度と空間的密度を分けることが有用である。可能であれば、系統的レビューで論じる関連研究を参照して区別をするつもりである。

暴行の場所と時間的側面 (Location of Assault and temporal aspects)

先行研究は、刑務所および精神病院における「ハイリスクな」時間と場所を強調することを目的としてきた。最近の研究は、暴力事件は食事時間、投薬時間、そして 21 時 00 分にピークに達することを示している (Gudjonsson, RabeHesketh, Wilson, 1999)。このことは、転換点となる時間あるいは不確実性のある時間に暴力が最も起こりやすいことを示しうる。攻撃の場所については、人が密集している場所が、施設内暴力にとって最も重要な状況のようである。

運営形式 (Management style)

重要な運営上の問題が、施設内暴力のレベルと関係しているようである。刑務所管理者が管理陣営と現場スタッフの間の摩擦を解決できなかったときに、より高い囚人殺人率が報告されている (Reisig, 2002)。さらに Ward (1987)は、経営状態の良い体制が重要だと強調している。彼が主張していることは、管理が混沌としていると高い暴力率を引き起こし、しいては 6 ヶ月間で 120 の刺傷が起きてしまったのだろうということである。

プログラムの利用可能性 (Program Availability)

プログラムの運営方法は、暴力の減少に寄与しうる (Walrath, 2001)。囚人によって運営されている非暴力訓練プログラムは、プログラムに参加しなかった囚人と比べて、参加した囚人の暴行率の減少に関係していた。スタッフへの支援プログラムも、暴行率と関係していそうである。Flannery, Hanson, Penk, Goldfinger, Pastva and Navon (1998)が、暴行を受けたスタッフのアクション・プログラム (Assaulted Staff Action Program[ASAP]) と

呼ばれるプログラムの実施効果を調べ、報告されるスタッフ暴行被害数について有意な低下があったことを報告している。

セキュリティ水準 (Security level)

セキュリティ水準は、施設内暴力と関係するものと認識されている (Porporino, 1986)。Canadian Federal Correctional Systems 内のセキュリティ事件の分布をセキュリティ水準と拘留体制ごとにまとめたものは、報告される暴行事件の 53%は、最高のセキュリティ水準にある施設で起きていると結論づけた。囚人人口のたった 31%だけが、それらの施設に収容されているにもかかわらず、である (Porporino, 1986)。Jayewardene and Doherty (1985)も、セキュリティ水準の役割を強調している。彼らは、ほとんどの暴行が最高のセキュリティ水準環境で起きていると結論している。こうしたセキュリティ水準の環境にいる人間は、解放的な刑務所にいる人間よりも「危険」だと考えられ、そのことが暴力事件の率がより高いことを説明できると憶測する人もいるだろう。一方で、厳しい規制と強くコントロールされた環境が、セキュリティ水準の高まりと同時に起きていると憶測する人もいるだろう。研究は、こういったセキュリティ水準の高い環境が、暴力を防ぐよりも、暴力事件を増やすだろうということを示している。

スタッフの特徴 (Staff Features)

「スタッフの特徴」という言葉は、施設内暴力と関連しそうな別の変数を指すのによく使われてきた。例えば、スタッフと施設の被収容者とのコミュニケーションの質が重要な変数だと分かっている (例えば Sheridan, Henrion, Robinson and Baxter, 1990; Cooke 1987)。スタッフの経験レベルも、施設内暴力と関連づけられている。例えば Hodgkinson, McIvor, Phillips (1985)は、訓練段階の看護師が、予想していたより頻繁に暴行を受けている一方で、准看護師は予想より暴行を受けていないことを示した。同様に、刑務所においてもスタッフの経験は暴行率と関係している (例えば Cooke 1987)。Davies and Burgess (1988)は、刑務所看守の経験と暴行率の関係を調べた。彼らが示した結果は、経験の長さは関連性のある要因であるというものだった。仕事の業績に関する特徴も、暴力事件のレベルと関連づけられている。Carmel and Hunter (1990)は、法医学的な州立精神病院において、スタッフのうち最低 60%が暴行事件の管理についての訓練を続けた病棟は、訓練を続けたのがスタッフの 60%未満だった病棟よりずっと低いスタッフ被傷害率を経験していたことを明らかにした。

ここまででレビューした研究は、状況的変数は施設内暴力に影響しているだろうということを示している。状況的変数と施設内暴力の関係を考察する際に目的とするのは、個人に基づく要因 (つまり犯罪歴、精神病など) の投入を最小にする、あるいは完全になくすことではなく、施設内暴力の原因を包括的に理解することである。法医学的状況および刑

務所状況における暴力の状況的決定因に関して増えている知識によって、暴力犯罪者への管理方針を改善すべきだという認識が高まっきている（例えば Bjorkly, 2000）。Wortley (2002)は、状況的リスク管理の介入に関する三つの重要な利点を見出した。第一に、状況的リスク管理の介入は、環境の小さな変化であろう。第二に、介入は素早く、実践的に、かつ費用効果の高い解決法を提供するだろう。第三に、限られた数の場所だけを考える必要があり、つまりこのアプローチは、個人ベースの介入に従わなそうな人間に効果的であろう（Cooke, 1989）。要するに、入手可能な文献は、状況的変数が暴力と関連していることを示している。これらのリスクファクターを標的とした介入は、リスク管理にとって時間効果および費用効果の高い戦略を提供するだろう。

2. レビューの目的

レビューの目的は、第一に、施設内暴力の状況的リスクファクターについてのエビデンスを評価すること。第二に、種々の状況的変数と暴力の関係を調べることである。これらの知見は、適切なリスク管理戦略の設計と遂行に寄与するだろうと想定される。これらの目的を達成するために、二段階の過程を経るつもりである。

第一の段階は、施設内暴力を減らすために状況的要因（例えばセキュリティ水準や、スタッフや囚人に対するプログラム）を操作して、その効果を評価している研究を識別することである。我々は、このレビューが関連性のある研究をあまり識別しないだろうと予想している。だから、状況的変数と施設内暴力の関係を調べている文献を識別するために第二段階を実施する。その第二段階は、施設内暴力と正および負の関係がある状況的変数を強調するために行う。

関連のある研究を入手するための各段階を、今後それぞれステージ1、ステージ2と記す。ステージ2に関する情報は、そのそれぞれがステージ1で利用される手順と同じだが、その情報を繰り返すよりも、情報が何ページに示されているかを提供する。

3. 方法論

ステージ1

概観

ステージ1は、施設内暴力を減らすために状況的変数を操作している研究を識別するために行う。関連する研究を入手し、関連する情報を引き出し、研究の知見を統合するというこの段階を以下に記す。

3.1 研究の包含基準と除外基準

目下の系統的レビューにとって、研究がふさわしいものであるかどうかを評価するために、以下の包含基準と除外基準を利用する。

1960年以降に実施された研究だけを系統的レビューに利用する

理由 本レビューで得られる経験的知見が、昨今の刑務所の状況的要因と物理的環境を描きしようとすると、1960年より前に実施された研究は適切ではない。

公開された研究と公開されていない研究の両方とも、レビューへの利用の可否を考える

理由 効果値の上向バイアス（upward bias）^{うわむき}を避けるため、また全ての関連研究を確実に識別するため、公開研究と非公開研究のどちらもレビューに含める。これらを区別することが、効果値に寄与するかどうかは、感度分析を使ったメタ分析で調べる。

方法論について、レビューに包含するための必要条件は設けない

理由 （無作為化対照実験が一般的に利用されている）健康心理学のような他の研究領域とは異なり、この領域における研究の方法論は多様である。純粋に方法論の種類に基づいて研究を除外することによって、関連する経験的知見を見過ごしてしまいかねない。ただ論文がレビューに含まれるためには、経験的データを示し、以下に記す研究の質の最低限の閾値を超えなければならない。

レビューに包含する研究は、研究の質の最低限の閾値を満たさなければならない

理由 系統的レビューの重要な側面は、質の高い研究を順に並べ、評価することであるため、包含基準として方法論的厳密さを含める必要がある。質の評価に関して、質の高い研究にとって重要な特徴は以下のとおりである。

- i) 内的妥当性
- ii) 記述の妥当性
- iii) 統計的結論の妥当性
- iv) 構成概念妥当性
- v) 外的妥当性

レビューワは、査読を受けた公開研究は、高い水準にあり、上記の尺度に関する側面を満たしているはずだと考えている。したがって、査読を設けている雑誌に公開された研究は、研究の質について個別に評価せず、それなりの質であると仮定し、適宜コード化する。だが公開されていない、あるいは公開されていても査読を受けていない研究は、レビューワが研究の質を評価する。量的研究の質を評価するために、Partial Synthesis Coding Form (Cooper and Hedges, 1994)から援用したチェックリストを用いる。質的研究の質は、CASPの吟味ツールを用いて評価する。10の問いからなるこのツールは、質的方法論の評価のために国立 CASP コラボレーションによって作成された（© Milton Keynes Primary Care Trust 2002. All rights reserved）。許可書を要求し、本系統的レビューにおいて研究の質の評価ツールとして、その質問紙を使うことが認められた。

言語上の範囲について、最初に研究の適格性を判断するレビュー過程において、英語以外で書かれた梗概（abstracts）を含める

理由 幅広い国に適用できるバランスのとれた包括的なレビューにするため、全ての国のデータを入手することが必要である。

16歳以上のサンプルを持つ研究だけを、レビューに適していると考え

理由 刑務所や少年の家のような環境の間に、明らかな文脈的差異と機能的差異があるため、16歳以上の人間が収容されている施設だけを含める。

男性参加者を用いている研究も、女性参加者を用いている研究もレビューに利用

理由 価値のある経験的知見を確実に見逃さないために、両性別について行った研究を利用する。その後のメタ分析において、性別を独立変数として投入し、施設内の暴力と促進的状況要因と性別の間に関係があるかどうかを調べる。

研究が実施された環境に関して、精神病棟内および刑務所内の暴力行為を調べている研究のみ、レビューに利用すると考える

理由 上記の環境で実施した研究だけを、人を施設内に閉じ込めていた場所としてレビューに含める。それに対し、コミュニティ内の住居のように、人が好きなときに自由にその場所を離れられるような場所は含めない。そのような環境の質を制限することによって、暴力のような行動とその人間が幽閉されている環境との関係を調べることができる。

施設内暴力の水準に関して、施設環境に施す介入あるいは変更を調べている研究をレビューに含める

理由 レビューの重要な目的は、施設内暴力を減らすために操作された、様々な状況的要因を評価している研究を識別することである。よって、そのような処置・変化の影響に関する知見を報告している研究は、その介入が暴力レベルに与えた影響を報告していれば関連のある研究とみなす。

事件の性質上、性的暴力、言葉の暴力、そして（あるいは）肉体的暴力と分類できる暴力事件の発生率を調べている研究は、レビューに利用すると考える

理由 この部分は、本研究の主目的と関係している。なぜなら、施設内暴力に影響を与える状況的変数の説明となっているからである。これら暴行の「タイプ」を含めることによって、施設内で発生しがちな暴力行為の包括的範囲を調査する。特定の状況的要因が、何らかのタイプの攻撃と強く関係しているかどうかは、メタ分析の中で調べる。様々なタイプの暴力行為を別々に調べる。加えて、パワーを示すためになされる暴行、および性犯罪者の監房において拘束の中でなされる暴行の観点から性的暴行も調べる。

最低2人が関与した暴力行為を調べている研究を、このレビューで考える

理由 暴力行為に関与している人数についてのこの基準は、暴行と自傷行為を区別するために利用する。

ギャングが関与している（刑務所内）暴力行為を調べている研究は、関連する研究とは見なさない

理由 ギャングの暴力は、2～3人が関与している暴力とは文脈上異なっているように思われる。ギャングの暴力がギャングへの加入や所属関係に根を持つものだと見られることが多いことを考えると、状況的変数よりも、囚人に関する個人的要因（つまりエスニシティや拘禁されることになった理由）、施設の外にある政治的文脈あるいは社会的文脈が、ギャングの所属関係および潜在的なギャングの暴力と関連し、引き起こし、あるいは促していそうである。

囚人（患者）同士の暴力、そして（あるいは）囚人（患者）からスタッフへの暴力、そしてスタッフから囚人（患者）への暴力を含む暴力行為の事件発生率を調べている研究を調べる

理由 この領域の研究は、刑務所内暴力行為はスタッフと囚人（患者）の両方が関与していることを示している。そのため、暴力行為をひき起こす際の、状況的要因の影響力の大きな役割を包括的にレビューするために、囚人間暴力と囚人-スタッフ間暴力を調べている研究を考察する。加害者と被害者の多様な組み合わせを、別々に分けて検討する。だがメタ分析では、特定の状況的変数が囚人（患者）-囚人（患者）暴力、あるいは囚人（患者）-スタッフ暴力と強く関係しているかどうかを調べる。

自傷行為のように、一人だけが関与している暴力行為を調べている研究は、本レビューには含めない

理由 前述のとおり、最低二人が関与している行為が、本レビューの関心である。

表現的/激情的暴力、あるいは道具的暴力と表せられる暴力行為を調べている研究は、関連研究とみなす

理由 暴力行為をはたらく動機付けは、結果から何が得られるか否かという点で異なりうるが、全てのタイプの暴力行為を含める。入手可能な研究知見の許す限り、多様な「タイプ」の暴力事件を調べる努力をする。

上述した研究適格性の基準を量的研究と質的研究の両方に適用する。だが、両研究タイプから得られた研究知見は別々に調べる。研究適格性のふるい分けは、二段階の過程となる。第一段階において、関連性があるかどうかの最初の判断は、キーワードを検索語として電子データ・ベースに投入した結果得られた論文のタイトルと梗概を読み、それに基づいて行う(セクション4.2)。研究をレビューに含めるためには、包含基準の全てを満たし、除外基準のいずれにも当てはまてはいけない。

時間的制約のため、一人のレビューワが、研究の適格性に関する最初の判断をする。決定に到れなかったら、さらに二人のレビューワが文献の本文全体を読み、全員で判断する。意思決定過程に加わる二人のレビューワは、この領域のエキスパートであるため、出所と著者の詳細は利用させない。レビューワ間で不一致があった場合、レビューワの多い方の判断を受け容れる。

最初の意思決定過程が、偏りのある方法で行われていないことを保証するため、オリジナルのタイトルと梗概のサンプル（すなわち 20%）を二人の熟練したレビューワによってレビューする。評価者間の信頼性は、カッパの統計的検定（Kappa statistical test）を使って評価する。あらかじめ定めておく、受容できるカッパ・レベルとして、.41 から 1.0 を用いる。これは、Landis and Koch (1977)によって提供された情報に基づいている。彼らは、評価者間の同意の強さを、0 未満なら悪い、0 から .20 なら取るに足らない、.21 から .40 なら可、.41 から .60 なら並、.61-.80 なら十分、.81 から 1.0 ならほとんど完璧だと整理している。カッパ値が .41 未満なら、評価者間の信頼性が低すぎると見なす。その場合、用いた包含基準と除外基準を洗練させ、収集したオリジナルの論文全てを、新しい基準に基づいてレビューする。

研究の選定過程の第二段階で、関連していそうだと識別された研究を、論文全体を基に考察するという条件つきでレビューに含める。最終的に含めるかどうかは、一度論文全体を読んでから決定する。包含基準を満たさない研究は、除外されることになる。除外する理由は、Reference Manager 10 におけるデータ・ベースに記録される。第一段階と同様に、明確に判断することができない論文は、二人の熟練したレビューワが再検討する。研究を含めるのが適切かどうかで、研究者が全員一致しなければ、第一段階と同様に、多数の意見の方が採用される。

基準を信頼して解釈できること、基準が研究を適切に分類できることを証明するため、研究選定過程の第一段階を始める前に、包含基準と除外基準の案内をする。下の表 1 は、包含した文献と除外した文献の例を示している。ここに書かれた文献は、(violence OR assault OR attack) & (prison OR secure units OR institutions OR hospitals)という検索ワードを使って PsycINFO データ・ベースから取り出した研究のサブセットのなかの一部である。

表 1. あらかじめ定めていた包含基準と除外基準に基づいて包含した研究と除外した研究例

包含研究	除外研究
Morrison, E., Morman, G., Bonner, G., Taylor, C. et al. (2002) Reducing staff injuries and violence in a forensic psychiatric setting <i>Archive of Psychiatric Nursing</i> 16 (3), p. 108-117 包含理由：この研究は、閉じられた精神病棟で行われ、患者によるスタッフに対する暴力行為を調査し	Finn, M. A. and Stalans, L. J. (2002) Police handling of the mentally ill in domestic violence situations. <i>Criminal Justice and Behavior</i> 29(3), p.278-307. 除外理由：暴力行為が行われた環境が、本レビューの具体的な目的と関係していなかった。

<p>ている。</p> <p>Resig, M.D. (2002) Administrative control and inmate homicide Homicide Studies: An interdisciplinary and International Journal 6 (1), p. 84-103</p> <p>包含理由：この研究は、囲い込まれた環境で行われており、囚人暴力と管理者の統制（状況的要因）の関係を調べている。</p>	<p>Walsh, Leese, Morven, et al. Psychosis in high-security and general psychiatric services: Report from the UK7009 and special hospital; treatment resistant schizophrenia groups. British Journal of Psychiatry 180 (4), p.351-357.</p> <p>除外理由：この研究は、統合失調症の診断と暴力事件との関係に関心があり、病棟環境に関する状況的要因を調べていない。</p>
---	---

3.2 関連する研究を識別するための検索方法と、検索結果の管理

関連研究の包括的なサンプルを入手する見込みを高くするために、検索語のしっかりとしたリストを利用して、広範な検索戦略を決定した（Jackson, 1978）。そのリストは、「暴力（violence）」と「施設（institutions）」というキーワードを使って、PsycINFO で検索して得られた論文から、重要な識別子（identifiers）と記述子（descriptors）を記録して作られた。重要で関連する全ての検索語を確実に含めるために、検索後は第三者が見直した。

以下の検索語を適当なデータ・ベースに打ち込んだ。

(i) (violence OR assault OR attack OR aggressive*) & (institutions OR hospitals OR prison OR secure units)

(ii) (violence OR assault OR attack OR abuse OR aggress* OR behaviour OR disorder OR conflict OR hostility OR offense OR offence OR offence OR incident* OR victim OR perpetrator) & (institutions OR hospitals OR prison OR secure units OR custody OR detention OR correctional facility OR jail) & (injury OR homicide OR inmate OR fight OR incident OR misconduct OR employees OR staff OR guards OR hierarchy OR management OR nurses OR doctors OR non-custodial staff OR conditions OR incentives OR rule OR violation OR interventions OR hotlines OR informants privileges OR reforms OR remission OR rules OR safety OR management OR routine OR precipitators OR active* OR classes OR facilities OR provisions OR programs

重要な検索語の構成は、個々のデータ・ソースに合わせて修正する。選んだデータ・ベースは、医学および社会科学の領域の、灰色文献、研究目録、および査読を受けた文献から得た様々な情報源を網羅している。あらかじめ設定した検索語と期間（1960年から現在まで）を用いて、データ・ベースを包括的に検索することの目的は、広範に文献検索を実

施し、複合的な研究リストを作り出すことである。

広範な公開文献と非公開文献を確実に得るために、以下のデータ・ベースを選んだ。Aggressive Research Intelligence Facility (ARIF), Applied Social Science Index and Abstracts (ASSIA), C2-SPECTR, Government Publications Office Monthly, Government Publications Reference File, International Bibliography of the Social Sciences (IBSS), Medline, National Crime Justice Reference Section (NCJRS), The National Institute for Clinical Excellence (NICE), OVID Nursing Collection, PubMed, PsycINFO, ESRC Funded Research (REGARD), System for Information on Grey Literature in Europe (SIGLE), UK National Health Service Research Register (NRR), Violence Research Literature Database (VIOLIT), Violence and Abuse Abstracts, Criminal Justice Abstracts, Web of Knowledge。キーワードを使ってのインターネット検索も行う。特に、アメリカ合衆国、ベルギー、カナダ、オーストラリア、スペイン、ニュージーランドの各国政府のウェブサイトをも、関連する報告書を得るために検索する。

この作業に要する仕事量のため、全ての関連する雑誌を手作業によって検索するのは不可能である。だが、補償措置を組み入れる。それは個人的なコミュニケーションである。この方法は、重要な検索結果を確実に見過ごさないように、あるいは無視しないようにするためにも用いる。この分野の重要な研究者（接触をはかる研究者の数はおよそ 300 人 [N=300]）と、施設の統制を管理している行政機関に手紙を送る。その手紙には、レビューの大意と、主たる研究課題と研究目的を書く。関心を持っている研究種別を示すために、レビューに包含する研究と除外する研究のリストも作成する。それまで対象としていなかった関連研究を相手が知っている場合、レビューと接触してくれるように依頼する。

いったん関連研究を識別したら、各文献で引用されている参考文献を調べる。関連研究が見つかった場合、レビューは、その論文が最初のデータ・ベース検索で識別されているかどうかを確認する。最初の検索で引き出されていないならば、その論文の梗概を入手し、レビューに含めるのに相応しいかどうか評価するために用いる。上記のふるい分け過程によって、論文が関連していそうであれば、論文全体を評価する。

3.3 データ管理

各電子データ・ベースを検索して得られた引用文をテキスト・ファイルで保存し、Reference Manager 10 にインポートする。雑誌検索と個人的なコミュニケーションから得られた情報も、この参照プログラムに記録する。入手可能なときには、電子化された梗概も保存し、参照プログラムにインポートする。その梗概がデータ・ベースから入手不可能であれば、図書館の相互貸借を利用してこの梗概を要求し、Reference Manager に入力する。

どのデータ・ベースから論文を引き出したのかという情報と、論文を見つけるのに使った検索語と、論文を引き出した日も記録する。同じ検索語を使って複数のデータ・ベースを検索したときには、参照される文献が重複しやすいため、最初にタイトルをレビューする前に、重複している論文を削除する。

どの研究を、レビュー過程のどの段階で除外および包含したかの経過を追うために、以下のデータ・ベースを構築し、管理する。

- (i) 検索戦略に基づいて引き出された、全ての公開論文を含むデータ・ベース
- (ii) 研究タイトルの複合リストを振り分けた後に含まれた公開論文のデータ・ベース
- (iii) 梗概とタイトルを読んだ後に含まれた公開論文のデータ・ベース
- (iv) 論文全体を読んだ後に含まれた公開論文のデータ・ベース

この段階で関連しているとみなされる論文は、研究の質を評価するために読まれることになる。量的研究と質的研究の両方の質を評価するために、コーディング用紙を用いる（付録 p. 26 を見よ）。最低限の質の閾値は遵守する（この情報は p.9 のポイント を見よ）。この包含基準を満たさない研究は、レビューに含めない。

3.4 主たる研究で用いられている方法論の記述

系統的レビューにおいて、この研究領域で一般的に用いられている実験デザインの重要な特徴を特定する。この領域において採用されている一般的な方法論を例示するために、質的研究と量的研究の典型的な研究例を論じる。サンプリング法、手順、そして研究デザインと測定法に関する情報を論じる。

3.5 それぞれの知見の判断基準

個々の研究が、複数の結果尺度を報告している場合、その各々を別々にコード化する。各研究は、一つの独立変数あたり、二つ以上の相関/ES をもたらさない。

3.6 コーディングのカテゴリー

関心のある重要な特徴、すなわち研究目的、研究デザイン（用いられた方法とサンプル）、分析法、そして結論についての情報を得るために設計された質問事項を用いて、各研究の本質的特徴および方法論的特徴をコード化する。系統的な方法でこれを実施するため、最初に、情報を記録するために用紙のフォームを用いる。次に、この情報を Microsoft Access で作った電子データ・ベースに入力する。

以下のフォームを使って、関連研究の情報の入手および管理を行う。

フォーム 1 研究情報のフォーム

フォーム 2 研究知見のフォーム

フォーム3 質的研究の質を評価するフォーム（CASP Appraisal ツールを用いる）

フォーム4 量的研究の質を評価するフォーム（Partial Synthesis Coding Form から援用したチェックリスト）（Cooper and Hedges, 1994）

（フォームのコピーは付録にあります p.26）

3.7 統計的手続きと慣例

研究を統合するための The Comprehensive Meta-Analysis というコンピュータ・プログラムを用いて分析を行う。95%信頼区間(Confidence Intervals; CI)を報告することになる。各研究への重み付けを、サンプル・サイズを基に割り当てる。この基準に従って研究に重み付けをすることの効果は、一連の感度分析によって調べる。研究デザインの種類に関する問題を、この方法を用いて調べる。上述のように、それぞれの知見のセクションにおいて、各研究は一つの独立変数あたり二つ以上の相関・ESを生起しない。

研究の質を評定することに関して、量的研究では、その情報をメタ分析に投入し、研究の質を感度分析によって調べる。研究結果の不均質性に対する説明として、研究間で観察された質の差を調べる。質的研究の質の評価情報では、この情報は系統的レビューにおける知見と関連付けて論じられることになる。この情報は、特に知見の解釈の指針として、また、なされた推測の強さの判断を助けるものとして利用する。

欠損データがある場合、欠損データを求める手紙を書いて、研究代表者と連絡をとる。その手紙には、系統的レビューの要約と、問題となっている研究をレビューに含めた理由、そして必要としているデータの要約を含める。欠損データの要求は、クローズドエンド型のリクエスト形式をとり、どのデータが必要とされているのかという混乱が確実にないようにする。研究の筆者は、自身のデータの利用に関して質問があれば、レビューワの一人と接触するために招待される。

研究者から欠損データを得られなければ、Lipsey and Wilson (2001)が提案したプロセスを守る。Lipsey and Wilson は、研究が、効果値を有意ではないと報告しながらも、実際の効果値を示していない場合には、その効果値を 0 と書くことを推奨している。また、有意な効果でも正確な確率を示していないものについては、その効果値は p 値が 0.05 であるという仮定に基づいて推定できると述べている。効果値を推定できない場合、その研究は分析から除外する。

3.8 質的研究の取り扱い

量的研究の知見をレビューするのに加え、このレビューのもうひとつの目的は、施設内

暴力の主観的経験についてのデータを含めて、施設内暴力の状況的リスクファクターのより完全で包括的な理解を提供することである。本レビューにおいて、質的研究は、メタ分析から得た情報を支え、補完するために利用する。この種の研究（例えば、主観的観点を評価することを目的とした研究）は、古典的な量的アプローチを用いては得られない情報を提供している。質的研究の系統的レビューへの貢献は認識されている（例えば Thomas et al. 2004）。Green and Britten (1998)は、質的研究のいくつかの利点を述べている。例えば質的方法は、科学的研究と臨床業務の間のギャップを埋める助けをすることができるとしている。質的研究の知見は、日々の文脈における介入の詳細な記述を提供することができる。そしてこの記述によって、実務環境において研究に基づいた介入を用いるときの障壁を理解できるようになる。さらにこの種の情報は、結果が不均質になることに対する理解を容易にしてくれる。リスク管理した介入を実施できるようにする要因を識別すること、暴力を経験する人の経験をよりよく理解すること、施設内暴力に対する状況的要因の影響力の個人的な観定の指標としてである。

質的研究の系統的レビューに対する利益や貢献は認識されているが、研究知見を統合するという問題も認識されている。例えば Thomas et al.は利点を認識しつつも、「たくさん のやっかいな理論的問題と実務的問題」も指摘している（Thomas et al., 2004, p. 1010）。質的研究は、量的研究と切り離されて考えられており、記述的なアプローチを使って分析するため、概念的問題と実務的問題を限定することが望まれる。研究知見を統合し、分析するための手順を以下に記す。

質的研究を系統的レビューに含める前に、4.1 節で論じる包含基準と除外基準に基づいて研究の適格性を評価する。質的研究では、コーディング・シートの情報は、研究知見を記述的に描くために用いる。質的研究の知見を描くという考え方は、David Gough によって構築された（*Evidence for Policy and Practice Centre, University of London*）。この方法は、母集団、研究を実施した国、年齢グループ、研究デザイン、研究の質、そして分析した個々の変数といった、変数の観点からキーワードを分析することである。この手法は、関心対象の領域における研究活動の系統的な記述を提供するため、質的研究を調べるのに用いる。これらの研究は、系統的レビューの中で記述的に論じる。

この研究領域で用いられている方法論も調べる。したがって、状況的要因が暴力に影響を与える役割を理解するために質的研究がいかに寄与するかを論じるとき、研究デザインを考察する。この情報は、メタ分析を使って調べることはしないが、情報を記述的に描くことを通じて、研究の知見を意味のある方法で統合することを目的としている手法を応用する。

3.9 追加的情報

上述したように、質的研究も量的研究も、その情報は、研究で用いられている研究方法と関連づけて言及する。関連研究の手短な概要から、公式事件記録、個別の研究目的にそって設計された事件報告書、暴力事件についての政府統計と図、サーベイ、インタビュー、匿名の報告、観察的研究、フォーカス・グループ法といった方法論の組み合わせがデータ収集に用いられることが予想される。われわれは、施設内暴力を測定するために使われている様々なタイプの研究方法論を、各方法の妥当性に照らして批判することが有用であると信じている。これは、最後の系統的レビューの討論セクションで示す。加えて、施設内暴力の報告および管理に関する問題を論じる。例えば、Hodgkinson et al. (1985)が行った研究は、暴行が発生したときにスタッフが作製する書類からデータを得るのには制限があることを認識している。彼らは次のように述べている。「おそらく暴行がより頻繁に発生する場所で、報告が避けられる事件もあるということは疑いようがない。それらの事件は、『仕事の一部』であるとみなされることが多く、その結果『報告には値しない』と考えられることがしばしばある。」(p.292)

事件の報告が終わったときと、実際の暴行との間の時間の経過の影響や、暴行について認識される重大性が、施設内のセキュリティ水準に影響を受けているかどうかといったさらなる問題は、研究知見と直接関連付けて考察する。

ステージ2

概観

ステージ2は、状況的変数と施設内暴力の関係を調べている文献を識別する目的で行う。この段階では、施設内暴力と正の関係がある状況的変数と、負の関係がある状況的変数の両方を強調するために行う。ここでどう進めていくかを以下に記す。

4.1 研究の包含基準と除外基準

ステージ1で述べた包含・除外基準を参照して、ポイント から までと、 から までをステージ2でも利用する。さらに、レビューとの関連性を評定する目的で、以下の包含基準をこの段階で用いる。

状況的変数と見なせる個人的特長（例えばスタッフの士気やスタッフの経験）を測定している研究は、レビューに含める。

理由 本研究においては、環境的変数と状況的変数が関心対象である。個人的特長と見なせて、施設内暴力と関連している何らかの変数（例えばスタッフの経験や士気）があることが期待される。だが目下の研究目的にとって、これらの側面は、個人的特徴よりも、管

理体制の特徴としての方が適切にとらえることができる。施設の管理体制の重要な特徴（例えばスタッフと囚人のコミュニケーション，スタッフの経験，スタッフの士気，スタッフの方針）と見なせる，暴力の状況的促進要因と（あるいは），施設内環境の物理的側面（例えば刑務所の設計）といった変数を含んでいる研究に関心がある。

研究の関連性を査定するために使う包含基準と除外基準について，ステージ 1 に特化しているポイントを除いて同じポイントを引き続き用いる（p.10 を見よ）。

研究が関係しているかどうかを判断するために，ステージ 1 で使った手順をここでも繰り返す（p.9-13 を見よ）。

4.2 関連する研究を識別するための検索方法と，検索結果の管理

ステージ 1 のように，広範な検索方法がこの段階でも都合がよい。検索語の多くは，ステージ 1 で使ったものと同じである。以下は，主たるデータ・ベースに入力する検索語の完全なリストである。

(i) (violence OR assault OR attack OR aggressive*) & (institutions OR hospitals OR prison OR secure units) _

(ii) (violence OR assault OR attack OR abuse OR aggress* OR behaviour OR disorder OR conflict OR hostility OR offense* OR offence OR incident* OR victim OR perpetrator) & (institutions OR hospitals OR prison OR secure units OR custody OR detention OR correctional facility OR jail) & (injury OR homicide OR inmate OR fight OR incident OR misconduct OR ecological OR situational OR rules OR screening OR equity OR seasonal variation OR lockers OR employees OR staff OR guards OR hierarchy OR management OR nurses OR doctors OR non-custodial staff OR generation OR surveillance OR units OR security OR frustration OR grievance OR conditions OR incentives OR rule OR violation OR interventions OR hotlines OR informants OR sentence OR race OR motivation OR phone OR population OR policy OR privileges OR reforms OR remission OR parole OR safety OR dormitories OR cubicles OR turnover OR privacy OR methadone OR multiple assailant OR weapons OR premeditated OR unexpected OR anonymity OR obedience OR temptation OR provocation OR rehabilitation OR rules OR safety OR accommodation OR bunking OR cells OR social climate OR area OR management OR routine OR precipitators OR expectancies OR time OR day or holiday OR reported assaults OR revenge OR riots OR suicide OR rape OR provocation OR recidivism OR trafficking OR theft OR transience OR active OR classes OR facilities OR provisions OR programs OR space OR crowding OR

administration OR admission OR age OR gender OR sentence OR allocation OR altercation OR antecedents OR food OR alcohol OR weapons OR drugs OR blind spots OR design OR layout OR boredom OR bully OR surround OR colour OR environment OR stress OR bodily harm OR control OR regime OR strategies OR visits* OR rights OR contraband OR property OR diet OR decision OR danger OR deindividual* OR delinquency OR sentence* OR disciplinary OR procedures OR dispute)

(iii) Prison & model & (consensual OR control OR responsibility)

4.3 データ管理

データは、プロトコルのステージ1で書いた方法で扱う（p.14を見よ）。

4.4 主要な研究で用いられている方法論の記述

この節で提供する情報は、系統的レビューのプロトコルのステージ1で書いたものと同じ形式に従う（情報はp.15を見よ）。

4.5 個々の知見の判断基準

3.5節で概説したものと同一プロセスに従う（情報はp.15を見よ）。

4.6 コーディングのカテゴリー

3.6節で書いたものと同一コーディング・カテゴリー（情報はp.15を見よ）を第二段階でも用いる。

4.7 統計的手続きと慣例

研究の知見を統合するために、3.7節で書いたのと同じ方法を用いて、第二段階から得た関連研究を調べる（情報はp.16を見よ）。

4.8 質的研究の取り扱い

第二段階で識別した関連する質的研究を、3.8節で概説したのと同じ方法を用いて調べる（情報はp.16を参照せよ）。

5. 時間枠

2004年6月

ステージ1 公開研究と非公開研究の検索，研究の包含基準と関連性評価の試験，研究コードとデータ収集の試験を実施

2004年7月

研究報告書からデータを得る，質的研究と量的研究の両方の主たる結果を識別する，統計的分析を行う

2004年8月

ステージ2 公開研究と非公開研究の検索，研究の包含基準と関連性評価の試験，研究コードとデータ収集の試験を実施

2004年9月 - 11月

研究報告書からデータを得る，質的研究と量的研究の両方の主たる結果を識別する，統計的分析を行う

2004年12月 - 2005年3月

ステージ1とステージ2の結果を広めて，書き上げる

6. レビューの更新計画

本系統的レビューは，キャンベル・コラボレーションに受容されたら，隔年を基本にアップデートしていく。十分な資金が提供されることで，この計画を確実に実行できる。

7. 謝辞

筆者らは，このプロトコルの準備を支えてくれた以下の方々に感謝申し上げたい。Brian Rae, Research and Development Directorate, Greater Glasgow Primary Care NHS Trust, グラスゴー; Professor Chris Webster, Senior Research Consultant in the Forensic Programme at St. Joseph's Healthcare, Hamilton, カナダ; Dr Anthony Petrosino, Harvard's Graduate School of Education, アメリカ合衆国; Roger Houchin, Glasgow Caledonian University, Scotland そして the Campbell Collaboration に，このプロトコルを提案してくれたことを感謝申し上げます。

8. 利害の対立

このレビューに関与した人の最近の研究と先行研究の献身に関しては，利害の対立はない。この研究の資金源に関しても，利害の対立はない。

9. 参考文献

Alpert, G.P. (1979) cited in Paterline, B.A.and Peterson, D.M. (1999) Structural and social psychological determinants of prisonization *Journal of Criminal Justices* Vol. 27 pp. 427-441.

Bjorkly, S. 2000, High risk factors for violence: Emerging evidence and its relevance to effective treatment and prevention of violence on psychiatric wards, in Hodgins, S.E. (Ed), *Violence among the mentally ill: Effective treatments and management strategies*: Dordrecht, The Netherlands, Kluwer Academic Publishers.

Bottoms, A.E. (1999) Interpersonal violence and social order in prisons

Tonry, M. and Petersilia, J. (1999) *Prisons* p. 205-282 Chicago, University of Chicago Press.

Carmel, H., and Hunter, M. (1990) Compliance with training in managing assaultive behavior and injuries from inpatient violence *Hospital and Community Psychiatry* Vol. 41(5), p. 558-560.

Cooke, D. J. (1989) Containing violent prisoners: an analysis of the Barlinnie Special Unit. *British Journal of Criminology*, 29, 129-143.

Cooke, D. J., 1992a, The psychological impact of prison riots on prison staff in Scotland, in Boddis, S. (Ed), *Prison service psychology conference* Conference Proceedings London, HMSO, p. 133-143.

Cooke, D.J (1997) The Barlinnie Special Unit: the rise and fall of a therapeutic experiment, in Cullen, E., Jones, L. and Woodward, R. (Eds) *Therapeutic communities for offenders*: London, Wiley, p. 101-120.

Cooley, D. (1993) cited in Wortely, R. (2002) Situational prison control – Crime prevention in correctional institutions. Cambridge, University Press.

Cooper, H. (1986) *Integrating research: A guide of literature reviews*. London, Sage.

Cooper, H. and Hedges, L.V. (1994) *The handbook of research synthesis* Russel Sage Foundation, NewYork.

Cox, V.C., Paulus, P.B., and McCain, G. (1984) Prison crowding research: The relevance for prison housing standards and a general approach regarding crowding phenomena *American Psychologist* Vol. 39 p. 1148-1160.

Davies, W. and Burgess, P.W. (1987) The effect of management regime on disruptive behaviour: An analysis within the British prison *Medicine Science and the Law* Vol. 28, p.243-247.

Department of Health (June, 2002) 2000/2001 Survey of reported violent or abusive incidents, accidents involving staff and sickness absence in NHS trusts and health authorities, in England.

DiIulio, J. (1987). *Governing Prisons*. New York, Free Press.

Folger, R. & Skarlicki, D. (1995). A popcorn model of workplace violence. In Vancouver, British Columbia, Canada: Paper presented at the annual meeting of the

Academy of Management August 1995.

Gendreau, P., Goggin, C.E. and Law, M.A. (1997) Predicting prison misconducts *Criminal Justice and Law* Vol. 24 (4), p.414-431.

Goetting, A., Howsen, R.M. (1986) Correlates of prisoner misconduct *Journal of Quantitative Criminology* Vol. 2 p. 49-67.

Goffman, E. (1961) cited in Campling, P., Davies, S. and Farquharson, G. (Ed) (2004) *From toxic institutions to therapeutic environments residential settings in mental health services* Gaskell, UK.

Gudjonsson, G., Rabe-Hesketh, S. and Wilson, C. (1999) Violent incidents on a medium secure unit over a 17-year period: *Journal of Forensic Psychiatry* Vol. 10, p. 249-263.

Hodgkinson, P.E., McIvor, L., Phillips, M. (1985) Patient assaults on staff in a psychiatric hospital a 2 year retrospective study *Medicine Science and the Law* Vol. 25, p. 288-294.

Hodgkinson, P.E., McIvor, L., Phillips, M. (1985) Patient assaults on staff in a psychiatric hospital a 2 year retrospective study *Medicine Science and the Law* Vol. 25, p. 288-294.

Irwin, J. and Cressey, D. (1962) Thieves, convicts and inmate culture *Social Problems* Vol. 10, 142-155.

Jackson, G.B. (1978) cited in Cooper, H. and Hedges, L.V. *The Handbook of research synthesis* Russell Sage Foundation New York.

Jayewardene, C.H. and Doherty, P. (1985) Individual violence in Canadian penitentiaries *Canadian Journal of Criminology* Vol 27(4), p. 429-439.

Jensen, G.F. and Jones, D. (1976) Perspectives on inmate culture: A study of women in prison *Social Forces* Vol. 57, p.57-58.

Landis R.J. and Koch G.G. (1977) The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics* Vol. 33, p. 159-174.

Lion, J. R., Madden, D., Christopher, L.R. (1976) A violence clinic: three years' experience: *American Journal of Psychiatry* Vol. 133, p. 432-435.

Lipsey, M.W. and Wilson, D.B. 2001 Practical meta-analysis *Applied Social Research Methods Series* Vol. 49 Sage Publications, London

Megargee, E. I. (1982) Psychological assessment in jails: Implementation of the standards recommended by the National Advisory Commission on Criminal Justice Standards *Crime & Delinquency Issues (National Institute of Mental Health)* Vol. 82-1181, 1982, p. 100-125

Megargee, E.I., (1976) Population density and disruptive behaviour in prison setting. In Cohen, A.K., Cole, G.F. and Bailey, R.G. (1976) (Eds) *Prison Violence Lexington* MA, Heath, p. 135-146.

Monahan, J., Steadman, H., Silver, E., Appelbaum, P., Robbins, P.C., Mulvey, E.P., H Roth, L. Grisso, T., Banks, S. (2001) *Rethinking risk assessment: The MacArthur study of mental disorder and violence*, New York, Oxford University Press.

Morrison, E., Morman, C., Bonner, G., Taylor, C., Abraham, I., and Lathan, L. (2002) Reducing staff injuries and violence in a forensic psychiatric setting *Archives of Psychiatric Nursing* Vol. 16(3), p. 108-117.

Nacci, PL, Teitelbaum, H.E. and Prather, J. (1977) Population density and prisoner misconduct rates in the federal prison system *Federal Probation* Vol. 41, p. 26-31.

Nijman, H. L, Campo, J.M., Ravelli, D.P., Merckelbach, H.L. (1999) A tentative model of aggression on inpatient psychiatric wards *Psychiatric Services* Vol. 50(6), p. 832-834

Porporino, F. (1986) Managing violent individuals in correctional settings *Journal of Interpersonal Violence* Vol. 1, p. 213-237.

Quinsey, V. L., Harris, G. T., Rice, M. E., & Cormier, C. A. (1998) *Violent offenders: appraising and managing risk*

Reisig, M.D (2002) Administrative control and inmate homicide *Homicide Studies An Interdisciplinary & International Journal*. Vol 6(1), p. 84-103

Sheridan, M., Henrion, R., Robinson, L. and Baxter, V. (1990) Precipitants of violence in a psychiatric inpatient setting *Hospital and Community Psychiatry* Vol. 41, p. 776-780.

Stephan, J.J. (1991) cited in Wortely, R. (2002) *Situational prison control: Crime prevention in correctional institutions* Cambridge, University Press.

Thomas, J., Harden, A., Oakley, A., Oliver, S., Sutcliffe, K., Rees, R., Brunton, G., Kavanagh, J. (2004) Integrating qualitative research with trials in systematic reviews *British Medical Journal* Vol. 328, p.1010-1012.

Green, J. and Britten, N. (1998) Qualitative research and evidence based medicine *British Medical Journal* Vol. 316, p. 1230-1232.

Toch, H.(1985) The catalytic situation in the violence equation *Journal of Applied Social Psychology*. Vol 15(2), pp. 105-123

Walrath, C. (2001) Evaluation of a prisoner run alternatives to violence project – The impact of inmate-to-prisoner intervention. *Journal of Interpersonal Violence* Vol. 16 (7), p. 697-711.

Flannery, R.B., Jr., Hanson, M.A., Penk, W.S., Goldfinger, S., Pastva, G.J., & Navon, M.A., (1998), Replicated declines in assault rates after implementation of the Assaulted Staff Action Program: *Psychiatric Services* Vol. 49(7), p.970-971

Ward, D. A. (1987) Control strategies for problem prisoners in American penal systems, Bottoms, A.E. and Light R. (Eds) *Problems of Long-Term Imprisonment Aldershot*, Gower.

Webster, C. D., Douglas, K., Eaves, D., & Hart, S. D. (1997). *HCR-20 Assessing risk for violence*. (2nd ed.) Vancouver: Simon Fraser University.

Wright, K.N. (1989) Race and economic marginality in explaining prison adjustment *Journal of Research In Crime and Delinquency* Vol. 26, p. 67-89

Wortely, R. (2002) *Situational prison control: Crime prevention in correctional institutions*. Cambridge, University Press.

10 . 付録
コーディング・フォーム

フォーム1 研究情報フォーム	
研究の確認者：	
書誌参照：	
情報源：	
出版年次：	
データを加えた日：	
<u>文献のタイプ</u>	
その業績は公開されたか、公開されていない	公開された 公開されていない
どこに掲載されている研究か	書籍 技術報告書 学会での論文 学位論文（修士・博士） その他（ ） 雑誌掲載文献
公開されている場合、査読を受けたものか	査読を受けた 査読を受けていない
研究はどこで実施されたか	
研究目的：	
目標：	

<p>研究デザイン：</p> <p>研究で立てられた仮説：</p> <p>研究における暴力の定義：</p> <p>サンプルの記述：</p> <p>サンプルの募集方法：</p>	<p>参加者のタイプ</p> <p>平均年齢：</p> <p>年齢のメディアン：</p> <p>性別：</p> <p>民族：</p> <p>サンプル数：</p> <p>サンプルのうち欠損した数</p> <p>追加したサンプルの特徴：</p> <p>ボランティア 無作為</p> <p>さらに詳しく：</p>
---	--

<p>研究の特徴</p> <p>研究環境</p> <p>調査した暴力行為 事件のタイプ：</p> <p>暴行のタイプ：</p> <p>暴行の重度：</p>	<p>刑務所 精神病院</p> <p>セキュリティ低 セキュリティ中 セキュリティ高</p> <p>囚人と囚人 いろいろな組み合わせ（ ） 囚人とスタッフ</p> <p>個々の暴力事件にどのくらい関与しているか： 誰が加害者か： 誰が被害者か：</p> <p>性的暴行 肉体的暴行 ことばによる暴力 組み合わせ（ ） 暴行をどう定義できるか： 手段としての暴行 表現 / 爆発的暴行</p> <p>その暴力事件は分類されたか</p> <p>事件をタイプ別に調べたか、あるいはまとめて調べたか</p>
--	---

<p><u>研究関心となっている状況的変数</u></p>	
<p>研究では、どういった状況変数を検証もしくは検討しているか：</p>	
<p>管理体制</p>	<p>セキュリティ・レベル 監視方法 監房体制</p>
<p>施設の建築的特長</p>	<p>建物のタイプ その施設で可能な監視方法</p>
<p>監房の構成</p>	<p>ベッドの数 監房の構造（シングル・ダブル）</p>
<p>時間</p>	<p>時刻 月</p>
<p>気候の特徴</p>	<p>季節特性 熱的快適性 空調設備</p>
<p>スタッフの特徴</p>	<p>スタッフと患者との相互作用の質 暴力事件の管理 訓練水準 スタッフと囚人との比率</p>

<p>人口密度に関する状況</p> <p>衛生状態</p> <p>リクリエーションとプログラムの利用可能性</p> <p>その他の変数</p> <p><u>状況変数は、評価対象の暴力行為にどのくらい寄与しているか</u></p>	<p>込み合い具合</p> <p>空間密度（一人あたりの空間量）</p> <p>社会的密度（スペースあたりの人数）</p> <p>監房内で利用可能な設備</p> <p>シャワー</p> <p>関心対象のプログラムの種類</p> <p>利用できるリクリエーション活動</p>
<p>研究タイプ：</p>	<p>質的研究 量的研究</p> <p>研究で講じた方法論</p>
<p>データ収集：</p>	<p>データ収集期間</p> <p>データ収集方法</p>

<p>質問紙：</p> <p>インタビュー：</p> <p>事件の報告</p>	<p>質問紙構成の情報：</p> <p>質問紙の長さ：</p> <p>質問紙調査を行った場所：</p> <p>質問紙作成者：</p> <p>インタビューのタイプ：</p> <p>スケジュールの記述：</p> <p>インタビューの長さ：</p> <p>インタビューした場所：</p> <p>インタビューを受けた人：</p> <p>事件を記録する基準：</p> <p>報告の主たる特徴：</p> <p>報告書作成者：</p>
---	--

フォーム2 研究知見フォーム	
処遇群のサンプルサイズ	_____
統制群のサンプルサイズ	_____
実験群の数	_____
	追加情報
統制群の数	_____
データ収集（遡及的；前向き）	（ _____ ）
募集方法	（ _____ ）
具体的な包含基準	（ _____ ）
具体的な除外基準	（ _____ ）
具体的な状況変数についての効果サイズのデータ	_____に基づいた効果サイズのデータタイプ 算術平均および標準偏差_____ t 値あるいは F 値_____ カイ二乗値_____ 比率頻度、二値_____ 比率頻度、多項_____ オッズ比_____ その他（ _____ ）_____ 効果サイズが書いてあるページ_____

<p>フォーム3 量的研究の評価フォーム</p> <p>8. デザイン タイプ :</p> <p>研究実施方法 :</p>	<p>研究を識別した人 : タイトル : 著者 :</p> <p>1 = 無作為化デザイン 2 = プリテストのある非等化デザイン 3 = ポストテストだけある非等化デザイン 4 = 時系列デザイン 5 = その他 _____</p> <p>9. 統制群 1 = なし 2 = あり</p> <p>1. ひとが特定の暴力経験を、状況的要因の影響のせいになっているという主観的意味を探求することを目的としている いいえ = 1 はい = 2</p> <p>2. 研究期間中のデザイン変更に対応できるように、研究がデザインされているか いいえ = 1 はい = 2</p> <p>3. 研究のサンプルは、理論、および（もしくは）研究が探求しようとしているのとは逆の文脈や意図に基づいて、目的をもって構成されて選ばれているか。 いいえ = 1 はい = 2</p> <p>4. テーマについての知識や理解のさまざまな情報源を探求している、あ</p>
---	---

国立 CASP コラボレーションによって質的方法論を評価するための 10 の問いが作られている。©Milton Keynes Primary Care Trust 2002. All right reserved.

1．研究目的を明確に述べているか

以下を考えよ：

- ・ 研究目標は何か
- ・ なぜこの研究が重要か
- ・ 研究に今日的意味があるか

2．質的方法論は適切か

以下を考えよ

- ・ 研究者は、研究参加者の行動そして（あるいは）主観的経験を解釈あるいは解明しようとしているか

るいは比較しているか

いいえ = 1 はい = 2

5．研究者は、データの解釈過程を明確にしているか

いいえ = 1 はい = 2

6．一般化可能性について主張がなされていたら、その主張はデータから論理的に、そして（あるいは）理論的に導かれているか

いいえ = 1 はい = 2

研究を識別した人

タイトル：

著者：

はい _____ いいえ _____

はい _____ いいえ _____

<p>上の2つの問いの答えが両方「いいえ」なら、研究の質を評価するのを続けない</p> <p>適切な研究デザイン</p> <p>3．研究デザインは、研究目的を扱うのに適しているか 以下を考えよ</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究者は、研究デザインを正当化しているか（たとえば、使用する方法をどのように決定したかを論じているか） <p>サンプリング</p> <p>4．サンプルの募集方法は、研究目的にとって適切か 以下を考えよ</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究者は、研究参加者をどのように選んだか説明しているか 研究者は、選んだ参加者が、研究に対して求めている知識に達するために、なぜ最も適しているのかを説明しているか サンプルサイズは、効果を示せるくらい十分大きいか。もし研究対象群あたり10未満なら、不十分とみなされる。 <p>データ収集</p> <p>5．研究論題を扱うための方法でデータを収集しているか 以下を考えよ</p> <ul style="list-style-type: none"> データ収集状況は正当化されているか データ収集方法は明確にされているか（例えば焦点グループ法、準構造化インタビューなど） 	<p>はい _____ いいえ _____</p> <p>はい _____ いいえ _____</p> <p>はい _____ いいえ _____</p>
---	---

- ・ 研究者は、選んだデータ収集法を正当化しているか
- ・ 研究者は方法を明確にしているか（例えばインタビュー方法なら、インタビューをどのように行ったかを示しているか、トピックガイドを使っているか）
- ・ 研究中、方法を修正していたら、研究者はどのように修正し、なぜ修正したかを説明しているか
- ・ データの形式ははっきりしているか（例えば、テープ録音、ビデオ、ノートなど）
- ・ 研究者は、データの飽和を論じているか

反射性（研究の協力関係 / 研究者バイアスの認識）

6 . 研究者と研究参加者の関係は、適切に考察されているか

以下を考えよ：

研究者は、以下の過程における潜在的なバイアスと影響という自身の役割を批判的に調べているか（研究テーマの定式化、データ収集、サンプル募集と場所の選択）

研究者は研究中のイベントにどのように対応しているか、そして研究デザインの変更の意味合いを考えているか

はい _____ いいえ _____

倫理的問題

7 . 倫理的問題を考慮に入れているか

以下を考えよ：

- ・ 研究の倫理的水準が保たれているかどうか読者が評価できるように、参加者にどのように研究が説明されたかを十分詳細にしてい

はい _____ いいえ _____

るか

- ・ 研究者は、研究で浮上した問題について論じているか（例えばインフォームド・コンセントや守秘義務関連の問題や、参加者についての研究中および研究後の研究の効果にどう対処しているかという問題）
- ・ 倫理委員会から承認を求めているか

データ分析

8 . データ分析は十分厳密か

以下を考えよ：

- ・ 分析過程の詳細な記述はあるか
- ・ 主題分析（thematic analysis）を用いていたら、カテゴリー/テーマをデータからどのように引き出したのかをはっきりとさせているか
- ・ 分析過程を示すために、オリジナルのサンプルからデータをどのように選択したのか説明しているか
- ・ 知見を支持するのに十分なデータが示されているか
- ・ 矛盾するデータをどの程度まで考慮に入れているか
- ・ 研究者は、分析中や提示するためのデータ選択における潜在的バイアスや影響力となりうる自分の役割を批判的に調べているか

はい _____ いいえ _____

知見

9．知見は明確に述べられているか

以下を考えよ：

- ・ 知見は明確か
- ・ 研究者の主張と一致する証拠と反する証拠の両方についての適切な議論がなされているか
- ・ 研究者は、自身の知見の信頼性を論じているか（例えば、三角測量〔訳注：複数の分析方法を用いることで結果の信頼性を高める方法〕、回答の妥当化、分析者を複数用意する）
- ・ もともとの研究主題との関連の中で知見を論じているか

はい _____ いいえ _____

研究の価値

10．研究にどのくらい価値があるか

以下を考えよ：

- ・ 研究者は、これまでの知識や理解に対するこの研究の貢献を論じているか（例えば現在の実務や政策、もしくは研究に基づく関連文献と関係付けて知見を考察しているか）
- ・ 研究者は、研究する必要がある新しい分野を見つけたか
- ・ 研究者は、知見を他の母集団にもあてはめられるかどうか、またどのようにしたらできるかどうかを論じているか。あるいは知見を別の方法、研究に使えるかもしれないと考えているか、あるいはどうやれば考えられるかを論じているか

はい _____ いいえ _____